

葉集を読む

松岡 隆子

人声の通りしあとや桜散る

醍醐喜美枝

今年は異例の緊急事態の中みんなで桜を楽しむことはできなかったけれど、それぞれに仰いだ桜の姿は一人一人の心に残っていることだろう。

人通りがはたと途絶えた夕べ、不意に桜が散りだした。桜は散る時も美しい。散る時の方が美しいとさえ思う時もある。誰に見られることもなく淡然と散ってゆくその姿は、醍醐さんの心に残る今年の桜であったに違いない。

たまさかの風にくくらむ花筏

二木 公子

散った桜の花びらが水面に連なって流れてゆく。最初は小さな花筏だったのが、落花が激しくなるとやがて川幅いっぱいの花筏になる。川幅一杯の花筏が流れに乗って次々と流れてゆく様は実に美しい。だが、掲句の花筏は川ではなく、流れのない濠や池などの花筏のようだ。動く隙もないほどびっしりと水面に拵がった花筏、何とか一句に詠めないものかとじっと見ていると、不意に吹いてきた風に花筏がふわっと膨らんだ。今、見た、という実感の上に立った句は揺るぎない。

就活の肩に花散る丸の内

西島 美晴

颯爽と丸の内を闊歩するOLを夢みて今日も就職活動に励む。(就活)と言う言葉が調べに無理なく溶け込んでいる。折から散り始めた桜が肩に降りかかる。そこは東京(丸の内)。大手銀行や大企業のビルが建ち並び日本の金融、経済

牡丹の深き紅描きをる

並木富美子

牡丹園などで牡丹を描いている人を見ての一句であろう。画架の前にあるのは深紅の牡丹である。あの深みのある紅の色がどのように描かれていくのか、赤い絵の具の他にどんな色を塗りその深紅を描き出すのか、じっと画家の手元を見つめる並木さんの姿を想像する。次第に目の前にある深紅の牡丹が画布に描きあげられていく。描いているのは〈深き紅〉であるとその色だけに焦点を絞ったカメラ視線は凄い。

じゃんけんに勝ちたんぼの絮を吹く 宮崎美智子

「じゃんけん・ぼん、あいこでしょ」、「勝ったあー!」。「じゃあ吹くよ」。ふーっと大きく息を吐いてたんぼの絮を吹く。風に乗って飛んでいくたんぼの絮を羨ましそうに見ている幼い女の子。母と子だろうか、祖母と孫かもしれない。じゃんけんで決めたのはたんぼの絮を吹く順番だったとは……。童心に返った時間、幼子への視線が温かい。